

FE聖杯戦争

白波要

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

FE覚醒、ifのキャラを英霊として呼び出すオリジナル聖杯戦争。

覚醒やifの時代がこちらでいう神代と同じ扱い。

うん千年後に現代まで発達したイメージ。

第1章く狂乱の瞳く

お前はこの僕が倒してみせる。

例え刺し違えても、必ず殺してやる…！

お前だけは、絶対に、許さない。

第2章くうたかたのく

泡のように消えてしまいそうな、遠い遠い記憶。

出会うはずのなかった君たちと、仲間といえる関係になれたことが誇らしかった。二度と会うことのできない君ともう一度会えたら、なんて言おうか。

第3章くあいされてた？く

貴方様から頂いた鎧

貴方様から頂いた武器

貴方様の手で作り上げられた体

貴方様からつけられた名前。

ぜんぶ、ぜんぶ、貴方様から頂いたモノ。

すべてが誇らしくて、すべてが嫌いだっただけ。

忌々しいあの王と同じ、きれいな藍色の自分の髪が何よりも嫌いだっただけ。

以上3章仕立ての予定。 予定は未定。

目次

第一章く狂乱の瞳く

1話 召喚 | 1

2話 Kill me | 13

3話 隔たり | 25

4話 You are mistake | 34

en | 34

5話 暗殺者／Class chan | 44

ge | 44

6話 fall down fall | 56

down | 56

7話 moonlight blue | 67

8話 I love you | 76

第一章 狂乱の瞳

1話 召喚

空が不気味なほど赤かった。轟々と唸る風は髪もローブもはためかせる。

夕焼けを背にして佇むもう一人の自分は驚愕に顔を歪ませている。自分はこんな顔もできるのだと、どこか他人事のように思った。

今は感謝しているんだ。あいつが俺自身だつてこと。あいつを終わらせるために、大切な人のためになれるってことを。だから、一緒に死んでやるよ。

魔書を握る手に力が入る。なんてことはない。いつものように発動させれば。すべてが終わる。俺の手で終わらせる。俺が、終わらせる。

——ありがとう、みんな。こんな俺を信じてくれて。

——ありがとう。お前と出会えてよかった。俺も本当にそう思うよ。

目を大きく見開き、悲鳴のような声で俺を止めようとする半身の声を聞きながら俺はすべてを終わらせた。

*

埃とカビの臭いが満ちる地下室で蒼井一哉は聖杯戦争に参加するマスターの一人として、サーヴァント召喚のための呪文を唱えていた。

そこは一哉の工房であり、一族の英知の詰まった一族にとって大切な場所だ。召喚を行うのなら、ここしかないとい哉は確信していた。

「——告げる!! 汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

時間と手間をかけて描いた魔法陣の上に立ち、エーテルにあおられて髪が舞う。

触媒らしい触媒はついで用意できなかったが、この右手の甲に生まれた時からある痣が良縁を手繰り寄せてくれると信じよう。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!」

魔法陣が激しく明滅し、込めた大量の魔力が工房に吹き荒れる。サーヴァント召喚に伴う大量の魔力消費に腰が抜けた。巻き上げられた埃と、風の強さに思わず目を閉じ、腕を構えて風よけにする。手応えは充分。サーヴァントとの確かな繋がりを感ずる。

風が止んだころ、目を開き、仰ぎ見れば、自身より少し年上の青年が立っていた。足

首近くまで届く長いコートに軽装鎧。特徴的な白い髪は優男風の彼によく似合っている。

「お前が俺のマスターか？俺はサーヴァント、ストラテジスト。エクストラクラスでの召喚だ。よろしく頼む」

「俺は蒼井一哉だ。こちらこそよろしく」

大丈夫か、なんて微笑みながら差し出された右手を握れば、引き上げられた。その力強さに神代の戦場を駆け抜けた英雄であることを実感した。

彼は俺の手の甲を複雑そうな顔で眺めた後、すぐに手を離れた。やはり、この痕が彼を呼んだのだろうか。

ストラテジストはぐるりと部屋を見渡すと、壁にかけてある一つの剣に興味を示した。

「これは？」

「我が家に伝わる宝剣なんだ。竜の牙を素材として作られたと伝え聞いているよ」

「マスター、剣の心得は？」

「多少。ただ、戦場で使えるものではないよ」

「だが、ないよりはマシだ。戦場に立つ際は持てよ」

それから、と続けようとするストラテジストを制して二人で居間に移動する。長話は

カビ臭い工房ですものじゃない。

地上に上がれば屋敷は真つ暗だった。それもそうだ。昼頃から召喚の準備をしていたのだ。日が暮れるのも当然だ。

明かりをつけてストラテジストを居間に通す。

暖かいコーヒーを持って戻れば、ストラテジストは居間で待機するよう言った時のままソファのそばで立っていた。

「はい、コーヒー。別に座って待っていてもよかったのに」

「ああ、ありがとう。なに、主に黙って座るのもどうかと思っただけだ」

ストラテジストは戦場に立つ際の心得や武器の使い方などを現代に生きる俺でもわかるように説明してくれた。その理由を問えば「俺は軍師だ。一人だけでは戦いづらい。多人数を運用することに長けているからな。お前の力、是非とも上手く使わせてほしい」とのこと。

短い時間だが、ストラテジストのことを少し理解できた。少なくとも善性を良しとする英霊であることは間違いない。

「ストラテジスト、お前は聖杯に何を望むんだ？」

「生きてあいつの隣に帰ること。それが俺の望みだ」

*

蒼井一哉の朝は早い。彼は朝ごはん及び昼の弁当の作成から、登校の準備まですべてを一人で行う。

緩やかな日差しの中、一哉は温まったフライパンに油をひき、卵液を流し込む。薄く引いた卵が少し固まれば、端からくるくると巻いていく。

「よっーほっー！」

美味しそうな焼き目をつけて大きくなつていく卵焼きに一哉は思わずにんまりと笑う。完成した卵焼きをまな板にあげて、次のおかずの作成に取り掛かる。

作業を続ける一哉の背後の空間が揺らめいたかと思えば、ストラテジストが姿を現した。霊体化を解いたのだ。

「上手に作るものだな」

「一人暮らしだからね。ある程度はできるようになるしかなかったし」

「そういうえば、両親はどこに？」

「蒸発したよ。俺が小さいころ、魔術の暴走で跡形もなく消えた。あの人たちにとって一番大事だったのが魔術だったからそんな暴走しかねないようなこともやったんだろうけど」

「さみしくはないのか？」

「んー近所に幼馴染がいてね。小さいときは面倒見てくれていたんだ。家族同然の付き合いだったから、さみしいとかはなかったよ」

「俺にも娘がいたんだ。親として、俺は悔しいな」

ストラテジストのつぶやきの後、不思議な間がその場を支配する。フライパンの上でウインナーがばちばちとはじけた。

「よかつたら卵焼き一切れどうぞ。どうせ弁当に全部入りきらないし」
「ではありがたく」

ストラテジストはホカホカと湯気を立てる卵焼きを一切れ、ひよいつと口に運んだ。

「うん、美味しいな」

花が咲くように綻ぶストラテジストの顔に一哉も満足そうに頷いた。

ストラテジストは美味しい美味いと繰り返しながらもその手を止める気配は全くない。

「ちよつ、ストップ。俺のおかず！」

「そつちのウインナー焦げてきてるぞ」

「まずいつ……!」

慌てて火を消す一哉にストラテジストはクスクスと笑うと、すうーつとその姿を消した。

*

一哉が校門をくぐった瞬間、まっすぐに視線を感じた。登校中、緩やかに感じていた視線がまっすぐに力強く一哉を射抜く。

(見られているな……)

(うん。しかも、ひとつじゃない)

二人は警戒しながらも、歩を進める。登校中の生徒が大勢いる中、いきなり戦闘にはならないだろう。だからといってジロジロと見られ続けるのは気持ちのいいものではない。

(ストラテジスト、どこかわかるか?)

(一つは方角だけ。距離まではわからないな。上手く隠している。もう一つが、この校舎の屋上だ)

(は……? 屋上?)

(屋上だな。お前でも見えるだろう)

ストラテジストに教えてもらった場所を見れば、同じ学校の女子生徒がこちらを覗き見ていた。こちらが気づいていることに気づいていない。

姿隠しの術もせず、気配も垂れ流し、魔術師相手に隠れる気がないのか彼女は。その癖、頭を少しだけ出して覗いているのだから、呆れ果てるほかない。

(あの顔には心当たりがあるよ。昼休み、呼び出してみよう)

*

「きりーつ、れーい、ちやくせきー」

日直のやる気のない号令が終われば、同時に午前の授業も終わる。教室だけにはとどまらず、校内はザワザワと喧騒に包まれる。

ある者は昼食を確保しに戦場である食堂へ向かい、またある者は友人と弁当を持ち寄って、思い思いの昼休みを過ごす。

一哉は教科書を片付けるとすぐさまクラスメイトのもとに向かった。今朝の女子生徒を逃がさないようにだ。クラスメイトという接点しかないが、ここは無視できない。違和感しかなかろうが、接触する。

「明石さん、ちよつと聞きたいことがあるんだけど、いいかな」

「うん。私も聞きたいことあったから」

明石さんは背後に一つ視線をやると快く頷いてくれた。彼女の手には可愛らしいピ

ソクの包みが握られており、左手は薄手の白い手袋に包まれている。今は大事にするつもりはないから持つていくのは構わないんだけど、一緒に食べるつもりなのだろうか。それならと、俺も弁当を持つて教室を出た。

日当たりの悪い中庭、今日の昼飯は陰気な場所ですることになった。

樹々が生い茂り、日の光を遮断する。秋特有の乾いた風は抜けていくものの、開放感や自然とは遠く離れている。一般生徒は日当たりのいい方の中庭へ向かうため、こちらは人通りも少なく、内緒話をするにはうってつけだ。最悪サーヴアントを実体化させることになったとしても、生い茂る樹々たちが神秘の秘匿に一役かってくれるはずだ。

木陰にあるベンチに座り、自分から弁当を広げる。明石さんの様子を窺えば、警戒はしつつもベンチに腰を下ろし、弁当を広げ始めた。

「明石さん、今朝のあれは何をしていたの？」

「今朝のつて……つて！気づいていたの!？」

吃驚仰天。彼女は驚きも頭わに小さく飛び上がった。

驚きたいのは俺のほうだ。気づいていなかったのだから。

「うん。校門をくぐった時に。姿隠しの術も使わず、気配も隠さず、何してるんだらうつて」

「あうあうあう……」

彼女はおかずを口に運んだポーズのまま、箸を啜えて唸っている。

「姿隠しができないのか、気配も消せないのか、そこまっで頭が回らなかつたのかわからないけど、どれにしたって聖杯戦争に参加するなんて無謀すぎる。降りたほうがいいよ」

「それはできないわ」

即答だった。さっきの情けない唸り声とは全く違う。力強い目がこちらをまっすぐと見つめている。

「もう、一族の願いを叶えるには聖杯に頼るしかないのよ。絶対に、自分から降りたりしない。もう逃げないの」

あわよくば参加を放棄してもらおう作戦は失敗。成功するとも思っではいなかったが。では次の作戦だ。

「同盟、とまでは言わないが、お互いにマスター殺しは無しにしないか？ クラスメイトとは言え、顔見知りを手にかけるの嫌だろう？」

「そりゃあ、嫌よ。でもそういうものだって、覚悟決めて出てきたのよ。私だって魔術師の端くれ。今はその案に乗れないわ」

「そうか。なら、仕方ない。時間とらせてごめん。昼間は手は出さないよ。でも……」

「ええ、わかつてる。次夜中に会ったら敵、でしょう」

お先に空の弁当を片付けて、教室に戻る。

明石さんと話してみてもわかったことは彼女にも譲れない何かがあるということだけだった。せめて、サーヴァントのクラスだけでもわかれば対策立てられたかななんて、後悔先に立たず。今更悔やんだところで遅い。

まだ初日だとストラテジストは慰めてくれるが、これは戦争でもあるんだ。あまり暢気なことは言つてられない。

「わーいーすつーい!!」

語彙のない言葉を声高に笑う一陣の風。見覚えのある我が校の制服に、見覚えのない白銀の髪の男子生徒だ。バタバタと来客用の緑のスリッパの音が笑い声と一緒に廊下に響く。

「ちよつ……ちよつと、まってよ、アーチャー……!!」

それを追いかけるのは可愛らしい顔の男子生徒だ。隣のクラスだったのは覚えているが、名前まではわからない。息を切らしながらも、白銀の髪のアーチャーと呼んだ少年を追いかけていった。

「ストラテジスト、今の聞いた？」

(アーチャーのサーヴァントみたいだな)

「マスターが三人もいるって……」

戦争だからと、意気込んできたのが間違いだったのかと思うほど、日常に馴染んだアーチャー陣営に思わず肩の力が抜けた。

(マスター、一つ注意するとな、声出てるぞ)

(あつ)

今更口を押えたところでもう遅い。本日二回目の後悔だった。

2話 Kill me

日も暮れ、街灯が街を照らし、静まり返る中、一哉は動き出す。ここからは魔術師の時間だ。

スニーカー、ジーパン、パーカーとラフで動きやすい服装で家を出た。ストラテジストに持つて出るように言われた剣はショートスキーケースに入れて肩にかけてある。

人通りも少なく、家によつては明かりが消えている。校区内をぐるりと見て回るのが今日の目的だ。

昼間に遭遇したアーチャー陣営や明石さんと遭遇できればそのまま戦闘に入れる。さすがにまだ初日なので実家に強襲するほどではなし、ストラテジストは単独では戦いにくいサーヴァントだ。できれば手を組みたい。

夜の帳の降りた住宅街は日常平和そのもので、戦争が始まっているなんて横にストラテジストがいなければ、思いもしなかっただろう。

公園を抜けて行こうと足を踏み入れた時、嫌な予感にそのまま足を止めてしまった。入ってきた入り口と反対の向こう側、そこにソレは棒立ちしていた。

虫の集る街灯に照らされた白く抜けるような長い髪は後頭部で一つに結われている。

「僕が、僕が、僕がああああああああ!!」

こちらに向けられる瞳はどろりとした血のように赤く、狂乱の檻にとらわれているのは自明の理。目の前のソレはバーサーカーだ。

このまま射抜かれてやるつもりは全くない。

「ストラテジスト!!」

「ああー!」

バーサーカーの手を離れた禍々しい矢は一哉に届く前に、ストラテジストの剣に叩き落される。

「さあ、行こう!」

ストラテジストは剣を持ちバーサーカーへと迫る。

ストラテジストがバーサーカーを引き付けている間に一哉は公園に結界を敷いて回る。住宅街のど真ん中にあるこの公園でこのまま何もせずに戦闘を開始してしまえば被害は免れないだろう。

剣と剣がぶつかり合うような激しい音をBGMに一哉は作業を続ける。

一つ、二つ、と剣戟を数えなくなつたころ、一哉の作業にも終わりが見えてきていた。と同時にストラテジストから念話が入る。

(作業中済まない)

(いや、もうすぐ終わるから問題ないよ)

(せっかく結界を敷いてもらったところ悪いが、状況が変わった。今の俺では勝てそうにもない。まあ、見てもらうのが一番早いんだがな)

ストラテジストの言葉に倣い作業をいったん止めて、剣戟の鳴り響く元へ顔を向ける。そこにはバーサーカーが二人に増えていた。

バーサーカー二人が代わる代わる攻撃と防御を担い、ストラテジストを追い詰めていく。あのバーサーカーの猛攻を前にして、ストラテジストもよくもっている。なにしろ、こちらには一本の矢も飛んできてはいないのだ。

(撤退はできそう?)

(ぎりぎりなのか、といったところか)

(手段は任せるよ)

(了解)

「覚悟はいいか!」

ストラテジストは討ちあっていたその超近距離で、手に持った剣の魔力を開放させる。

魔力はバチバチと音を鳴らし、雷となって二人のバーサーカーを襲う。

突然の激しい明滅にバーサーカーは動きを止めた。

その隙を狙い、ストラテジストは宝具の一つを展開する。腰ほどまであったロープは消え、軽装鎧も白銀で全身を覆うものになる。馬を呼び、一哉を抱えて公園を離脱した。追いかける矢はするりと躲す。

追いかけてくる気配はないが、道を曲がるまで執拗なまでに矢は追いかけてきた。

一哉は事前にストラテジストの宝具を聞いていたとはいえ、撤退手段が騎馬で住宅街を駆けまわることとは思ひもなかった。

ストラテジストに抱えられたまま、大慌てで姿隠しと消音の魔術をかける。これで夜半に白銀の鎧を着た青年と白馬は噂に上がることもなく、明日大騒ぎになることもないだろう。

後ろを振り返れば、バーサーカーの姿はなく、気配も公園から離れてはいない。撤退完了だ。

「マスター、先ほどの戦闘で分かったことが四つある。彼は俺を姉と勘違いしていること、二人目のバーサーカーは写し身であるの弓が発生させている。さらにあの弓がバーサーカーの能力を底上げしている。射程は並の弓兵の倍はありとみていい。弓の弱点である近接での戦闘も試みたが近接射撃も心得ているようで、弱点になりはしなかったよ。一対一の戦闘はオススメしないぜ」

「やっぱり、協力者を探して、君本来の戦い方にするべきかな」

「ああ、その方がまだ勝機はある」

「明日また、明石さんの説得をしてみよう」

*

夜も更け、静かな住宅街をアーチャーはマスターとともに歩いていった。

聞こえてくる音は車の排気音とマスターの足音くらいで、獣の声は聞こえやしない。

ふと、空を見上げれば、暗い空から月だけが二人を見下ろしていた。星は少なく、かすかに瞬くのみだ。

僕の生まれ育った世界との違いを感じる。

僕の生まれた国は自然が多く、星も綺麗だった。育った異界では、森に入り、狩りをした。

ここが森ならば、自慢の狩りの腕をマスターに見せられたのに。いや、森だったからといって、果たして本当に見せられただろうか。この世界の森は人の手が入りすぎている。獣たちが出てきてくれるとは到底思えない。

少し休憩しましょう。そう言ったマスターは路地を抜け、公園に足を運んだ。

虫の集る街灯にじんわりと照らされた遊具は少し不気味で、昼間の喧騒と比較してさ

らに薄暗い。

公園の真ん中に人影があった。この時代では見なくなつた着物を着ており、白く長い髪は高く結い上げられていた。男性はこちらに背を向けて立ち尽くしている。

「つ……い！」

見覚えのある背中だった。

ずっと、ずっと追いかけてきた背中だった。世界で一番かつこよくて、一番強いんだ。憧れていた。尊敬していた。自慢だった。こんなところで会えるなんて思わなかった。

思わず、近くまで駆け寄って、肩に手を置いた。いつもみたいに笑って振り向いてほしくって。

振り向いた顔は恐ろしくも無表情で、お揃いだったはずの琥珀色の瞳は血のように赤かった。

手に持った弓は禍々しい気配を放ち、矢がつかえられている。その標準はしつかりとアーチャーの胸に向けられている。

アーチャーは信じられなかった。

街灯に照らされ、振り向きあらわになつた顔は確かに、見知つた顔で、弓を向けられていることを信じられなかった。

狩りの腕前を褒めてくれた。抱き着けば、柔らかく頭をなでてくれた。

素直な人ではなかった。僕が言うのもなんだけど、意地っ張りで捻くれた人だった。けれども優しいところもあるんだって、僕は知っている。

褒めてくれるときは柔らかく頭を撫でてくれながら、琥珀色の目を幸せそうに細めて言うんだ。

「よくやったね、——」って。

目の前の瞳は赤く、口からは怨嗟が漏れ溢れている。

その瞳はこちらを見ているが、僕のことを見てはいないだろう。

矢羽を持っていた手が離される。

ここで僕の戦争は終わるのかな。

「まったく、そんなだらしない姿を兄さんに見せる気かい？」

突然の乱入だった。アーチャーの目の前にいきなり木が生い茂り、矢を防いだ。

乱入者は黒く逞しい馬に跨った男性だった。金の髪に黒の鎧。左手には魔導書が握られている。

「アーチャー、勝手に飛び出さないでください！」

心配したマスターが駆け寄ってくる。一通りアーチャーに怪我がないことを確認すると、金髪の青年に向き合った。

「助けていただいたことは感謝いたします。ですが、これにあなたにどんなメリットが

「？」

「それは撤退できた後に僕のマスターから説明があるはずさ。まずはこの場を切り抜けるべきじゃないかな」

「ありがとうございます」

金髪の青年は、駆けだしたアーチャーとそのマスターを見送ってから自身も後を追う。

白い髪のバーサーカーは先ほどと変わらず、呻きを挙げながらアーチャーだけを狙い続ける。金髪の青年はそれを丁寧に魔術で撃ち落とし、殿の務めをしっかりと果す。

公園を離れ、角を曲がったところで追撃がなくなった。バーサーカーはあの場所を動けない何かがあるのだろうか。

*

遠見の魔術で見ていたとは言え、明石^{あかし}由紀^{ゆき}はハラハラとした心持で自身のサーヴァントの帰還を待っていた。

無事に公園のバーサーカーから離脱し、アーチャーとそのマスターを先導し我が家に向かっているのは知っているが、落ち着かない。

「マスター、戻ったよ。アーチャーとそのマスターには玄関で待つてもらっている」「ありがとうキャスター」

明石は自身のサーヴァントの無事の帰還にほっと胸を撫でおろした。

戻ってきた金髪の青年——キャスターのサーヴァントに礼を言おうと、明石は玄関へ向かった。

玄関扉の覗き窓の向こうには可愛らしい茶髪の少女が立っていた。

どこかで見たことあるような顔の気もするがと不思議に思いながらも、鍵を開けて彼女を招く。

比較的新しく歴史の少ないこの家も、紛いなりにも魔術師の家。中から招かないと良くないことが来訪者に起こる。今回はそうだったことは避けたい。

彼女はおっかなびっくり、警戒しながらも招かれてくれた。

居間に通し、紅茶を持って戻る。

居間のソファでアーチャーは好奇心と戦い、アーチャーのマスターはそれをなだめている。

「えっと、紅茶入れてきたんだけど飲める？」

「わあ、暗夜のお城で飲んだのだ！馴染みがないから結構好きだな」

アーチャーはいただきますと言ってから素直に紅茶に口を付けた。隣のマスターが

頭を抱えている。毒なんて入っていないけれど、迷いもなく口を付けたアーチャーにも驚いたのだ。

彼女はさぞ振り回されているに違いない。素直すぎるアーチャーを持つ目の前の少女に多少同情した。

「毒は入ってないよ。今、あなた達を殺すよりも、生かして同盟を組む方がメリットが大きいもの」

「先ほどは助けていただき、ありがとうございます。紅茶もありがとうございます。その、同盟というのは？」

「さっきのサーヴァント。あなた達が来る前にあの公園で一戦があつただけけれど、それを見ていたキャスターが『あの強さを僕は知っている。あれは一对一で勝てるようなものじゃない。多人数で挑んでようやくと殺せたものだ』って言うから。助けに入ったの。一緒に戦ってほしくて」

「うん、いいよ。僕もあの人を止めてあげたいから」

私の言葉に返事したのはアーチャーだった。

「マスター、いいよね」

「止めても聞かなさそうなのはわかってます。勝手に飛び出さないでくださいね。傷が治せなくなりますから」

穏やかに微笑む彼女に、サーヴァントとの確かな絆を感じる。羨ましいと純粹に思う。キャスターとの間にはまだ壁を感じるから。

「決まりね。私の名前は明石由紀。サーヴァントはキャスターよ。よろしく」

「はい。僕は白谷あかりです。それとこちらがアーチャーです」

その後、同じ高校の隣のクラスだとわかり、詳しい作戦会議は明日することになった。先にバーサーカーと戦っていた蒼井くんとも共同戦線を張れば心強い。

その日は連絡先を交換してお開きとなった。

3話 隔たり

昼休み。一哉は昨日に引き続き日当たりの悪い中庭で昼飯を食べていた。

本日のメニューは炒飯と唐揚げ、酢豚、玉子焼きだ。炒飯と酢豚は昨日の残りで今朝作ったのは玉子焼きだけのお手軽弁当だ。

メンバーは昨日接触した明石由紀とすれ違ったアーチャーのマスター（白谷あかりというらしい）と各々のサーヴァントだ。昨日とは打って変わった賑やかな食事となっている。

キャスターとアーチャーの二人は実体化し、制服を身にまとっている。ストラテジスト一人だけが「二十代半ばの俺がそれを着れば犯罪だろう」と嫌がった。

今朝、登校してすぐに明石さんに呼び出された。内容は先日遭遇したバーサーカーについてだった。昨日断った同盟を結びたいとのこと。

俺としても願ったり叶ったりだ。ストラテジストは軍師だ。元々、前衛で戦えるような戦士ではない。

今回の招集者の明石さんが口を開いた。

「さてと、みんな大体食べ終わったようだし、キャスター、昨日のバーサーカーについて

教えてくれるかしら？」

「あれは白夜王子タクミの成れの果てだ。ある程度のことを知っていたであろう兄さんは僕にも何も話してくれなかったからね、僕が知っているのはアレは単騎で倒せるようなものじゃないってことと、近距離と超長距離の射撃から弱点らしい弱点は見えず、二人一組で行動するため攻防一体となっており手が出しづらいつてことくらいさ」

「そ、それってどうやって倒すんでしようか……？」

「当時は僕の所属していた軍の長であるカムイが竜になって防御を固めて近づき、夜刀神・暗夜で倒していた」

「戦略も何も無いパワープレイだな。その戦略はさすがに今回取れないぞ」

ストラテジストは大きく頭を抱えていた。

「俺から提案できる策は三つだ。一つ、超長距離射撃を超える超超長距離射撃を行う。二つ、アサシンのサーヴァントを仲間に引き込み、暗殺してもらう。三つ、一組が囷となりもう二組で撃破する。ちなみにオススメは三つ目だ」

「囷といつても一体誰がするのよ」

「まあ、俺たちだな」

「やっぱり、そういうと思ったよ」

今度は俺が頭を抱える番となった。確かに、バーサーカーはストラテジストに異様な

ほど執着していたし、ストラテジストなら、防衛であれば可能だと俺も信じているが、だからといって囚役を買って出るのかこの英霊は。

「幸いにも、バーサーカーは俺のことを姉だと呼んで狂ったように標的にしてきた。まあ、狂戦士バーサーカーだからなんだが。それに、囚だけに専念するのであればやりようはいくらでもある。問題はキャスターとアーチャーの二人でバーサーカーを撃破できるかだが……」

「大丈夫。僕が絶対に倒すよ」

——僕が絶対に。

アーチャーは重ねるように言葉を繰り返した。

「そういえば、タクミ王子で思い出したんだけど、今度白夜神器の展覧会をするみたいなんだ」

俺は携帯を操作して展覧会のページをみんなに見せた。

そこには現存している神器、雷神刀と風神弓がある。開催日はまだ数日ある。

「わあ！風神弓だ！まだ現存しているなんて」

食いついてきたのはアーチャーだ。その好奇心いっぱい顔をキラキラと輝かせている。弓の英霊だけあって風神弓に興味は尽きないようで、俺の携帯を握りしめて離さない。

その輝く瞳は携帯からマスターである、あかりに向かう。

「バーサーカーの件が終わったら行きましようか。それまでには終わらせたいですし」
「いいの!?!」

「はい。昼間の展覧会ですから、さすがに触れないでしょうけど、行きましよう」

わーいわーいと喜ぶアーチャーは年相応どころか、さらに幼く見えた。

「それじゃあ、今日の放課後、図書室に寄ってみない? タクミ王子つてこの国の英雄なんだし、なにか資料があるかもしれない」

意義は? と確認する明石さんに誰もそれを唱えなかった。放課後は図書室で決まりだ。

*

つつがなく授業も終わり、放課後。一哉達は図書館を訪れていた。放課後の図書館は人が少なく、司書も自身の作業に集中していた。実体化して制服を着ているアーチャーとキャスターに誰も不審がらないことを一哉はハラハラと見守る。

「あつた。タクミ王子の項目」

明石さんのめくる本はふわりと埃を舞い上がらせ、古書特有の古臭い匂いが広がっ

た。

「えっと、白夜王国の王子で神器風神弓の継承者。弓と剣の腕に優れ、放った矢は沼地にもかかわらず外れなかった。戦禍によって荒れ果てた白夜王国の復興に尽力する。それまで見られていた人間的な甘さは影をひそめ、有能な指導者として国中の人々から認められ、頼られる存在になっていった、だって」

「あれ？バースーカーになるような狂ったエピソードがないな。それにキャスターの言葉とも合わない」

「もしかして、なんだけれど……」

キャスターはそう前置きしてから言葉が続ける。

「僕たちの辿った歴史とこの世界の歴史には大きな隔たりがある……？」

「そんなことってありえるんでしょうか？」

「現実においているのだから、否定すべきじゃないよ。アーチャー君の知っていることも教えてくれないか。僕の予想が正しければ、君も僕と近い時代を生きていたはずだ」

「僕はこの戦争が終わった後、母上に連れられて暗夜のお城に行ったんだ。母さんの大事な人たちに会いに行こうって。そこで会ったのは豪華な玉座に座る冷たそうな人——キャスターさんだった」

「僕が玉座に座っていた？そんなことがあるのか……」

項垂れるキャスターに明石由紀はかけられる言葉を持たない。アーチャーの歴史ではキャスターが王位についているということは、キャスターよりも継承権のあった人間は死んでいるか、それを放棄したということだ。

キャスターの兄は責任感と次代の王である自覚を持った良い王子だったという。そんな人間が放棄するということは明石由紀からしても考えられなかった。

「アーチャー、君はきつと白夜の人間だ。君にとつてはバーサーカーの存在は酷なものだっただろう……」

「うん。悲しかったけど、母さんもないこの世界じゃあ、僕が止めるしかないんだ。うん。僕が止めたいんだ」

「強いな、君は。君を見ていると兄さんを思い出す。白銀の髪がそっくりだ」
「へへへ……僕も母さんそっくりのこの髪が自慢なんだ」

アーチャーははにかみながら、自身の髪に触れた。その誇らしげな顔に両親にたくさんの愛情を受けて育ったのだと一哉にも予測できた。

いい親だったんだな。俺の親とは違う。子供を一番に考える親。きつとそんな人たちだったんだろう。

「ちよつと調べたいことがあるから」

そう言つて、一哉は一行から少し離れた。幸いにして、単独行動は許された。霊体化したストラテジストと共に移動する。

調べたいものは自身のサーヴァントのことだった。ストラテジストはちよつとコアな歴史ファンなら知っている程度の知名度だ。正直、一哉も召喚してからネットで少し洗つた程度の知識しかない。どうしてこの英霊が一哉の召喚に応じてくれたのか、共通点を探してのことだった。

調べても調べても、ストラテジスト個人に関する情報は少ない。つかみどころのない人物で、見る人によつて見る角度によつてその個性は色を変える。

ある書物では冷酷な軍師であつたと書かれ、ある書物では王のことを考え諫めることのできた人物であつたと書かれ、またある書物では軍の皆のことを考え相談に乗る良き人格者としても書かれていた。

(いやいや、後世にこんな風に書かれるとこそばゆいものがあるな)

(笑い事じゃないんだよ。俺はお前のことを知りたいのに、これじゃあ、どれが君のことなのかわからないぞ)

一哉がめくるページをニヤニヤと眺めるストラテジストに一哉は呆れだしていた。

(一哉、アクアという英雄は知っているか？戦争後の記録は一切残っておらず、実在したのかどうかまで疑われる彼女よりは俺の伝承は残っているだろう?)

(お前が彼女よりは近代の英霊であることに感謝するよ)

べらり。もう目ぼしい情報などないだろうと、半ば諦めでめくったページに一哉は驚愕する。

手袋をはめて隠している右手の甲にある痕あとと同じものが載っていたのだから。

六つの目のようなものが特徴的なそれはこの十七年間毎日見続けてきたものだ。見間違えるはずもない。

(なあ、ストラテジスト。やつぱりこの痕が俺とお前をつないでいるのか?)

ストラテジストは周りに人がいないことを確認すると霊体化を解いた。

そうして手袋を外し、その右手の甲を一哉に見せた。一哉と同じものが同じ場所にある。それを見せるとストラテジストはまたも霊体化して溶けてしまった。

(それは竜の器であることを示すものだ。それがこの世界で、この時代でどんな意味を持つのかはまだ不明瞭だがな。さすがに情報が足りない。というより肝心なところの記録が一切なかったな。誰かが消したか……?)

(竜の器……)

(ああ。そのあたりの情報はお前の家の地下室のほうが情報が多いだろうな)

(よし、帰ろう。今晚出る前に調べよう)

一哉は引つ張り出していた本を片付け、帰宅の準備をする。

帰る間に明石さんとあかりの様子を覗けば、二人そろって難しい顔をして本を覗んでいる。キャスターはすました顔で本を読んでいるが、その表紙が「美味しいみそ汁の作り方」なのはどういうことなんだ。

「明石さん、あかり、俺は家の調べもの思い出したから先に帰るけど二人はどうする？」
「あー……私も疲れちゃったし、そろそろ帰ろうかな」

「僕はもう少し調べたかったですけど、アーチャーも部屋を出てますし、帰ります」
片付ける二人を待つてから、そろって帰途についた。

日も暮れだし、町が綺麗な茜色に染まる。近くにいるはずのアーチャーやキャスターの顔が見えづらく、存在が揺らいだような感覚になる。

同じように制服を着て、この街を歩き、同じ夕日を眺めていても彼らは英霊で、過去の人物なのだ。例え、みそ汁の作り方に興味を示す彼でも。

4話 You are mistaken

一哉は帰宅してすぐに、工房である地下室へとストラテジストを伴って向かった。

そこは日の光も差さず薄暗い。定期的に掃除はしているが追い付いていないのか埃っぽく、一哉とてこの場は好んでいない。両親が傾倒した魔術に対する誇りもなく、増してやその両親が消えた場所であるならば足も遠のこう。

壁一面本棚と化した工房で、二人は手分けして歴史書を探す。もしくは蒼井家の家系図。ストラテジストの読みが正しければ、求めているものはそこにある。

「ストラテジスト！多分これだ」

「見せてくれ」

本の山に埋もれながら、一哉は声を上げた。ストラテジストも読めるよう、傍によつた。

「時の王は偉大なる竜神様の力を恐れ再び封印。我らが偉大なる竜神様——は長く眠ることになった。」

一哉にはその竜神様の名前が読めなかったが、隣のストラテジストは険しい顔をして、その文面を睨んでいる。

「そうか、この世界で俺は封印することを選んだのか、俺は死ねなかつたんだな……」

ぼつり。か細い声で呟いたかと思えば、その顔を右手で覆い隠してしまった。その顔色は窺えないが、いつもにない気弱な声に一哉の不安は煽られる。

「ストラテジスト……?」

「心配させたか。悪いな……お前の両親が研究してた書物とか残っているか?」

「ああ。捨ててはないはずだ」

一哉は大きな書き物机へと移動した。そこにはフラスコやピーカーなどの実験器具と分厚い書物、そして手記が残されていた。両親が消えてから、久しぶりに開けるそれは多少の劣化はあるものの、まだ読めた。当時はさっぱりわからなかった魔術式もこの数年の研究によって多少理解できるようになっている。

読み解いていけば、その手記には封印術と降霊術について書かれていた。

「もしかしてなんだけど、俺の親はさっきの竜神様?の封印を解いて、降霊術で降ろそうとしていた、とか?」

「マスター、大正解だ」

力ない声でストラテジストは語る。

「この当時、ややこしいことがあってな。大体の事情は省くが、この竜神は邪神と呼ばれていて、世界を絶望で染め上げようとしていたんだ。俺の生前の世界では、この邪竜を

殺すことに成功した。だから器の証も意味がなくなり、存在しなくなつた。だが、この世界では違う！邪竜を殺すことを選択せず、封印することを選んだ。よつて、証の意味はあり、その痕あとが存在している」

「つまり、邪竜は今も封印されていて、復活の機会を探っているのか」

「正解だ。花丸でもやろうか？」

「茶化すなストラテジスト。俺の両親は、何をしようとしていたんだ……」

「邪竜を神と崇め、その復活をしようとしていたんだろうな。たぶんその研究の過程で失敗し消えた」

「どうして、そんな邪竜を信仰していたんだろう」

「そりゃあ、俺の生前の話だが、国一つ上げて信仰されるよな竜だ。終わりは始まりでもある。終わりをもたらす邪竜が始まりのシンボルでもおかしくはない」

「その邪竜、いつ復活するんだ？」

一哉の問いにストラテジストは手記をめくり、力なく首を振つた。

「さすがにそこまでは書かれていない。生前の世界線でも何千年と先の話だと聞いた」

「もしも、もしもの話なんだが、この戦争中にその邪竜が復活したとして、ストラテジストは手伝つてくれるか？」

「この現代社会と逆行して生きる魔術師の一哉でも、この世界がそんな風に滅ぼされて

いいとは思えなかった。関係のない平和を謳歌する一般人が犠牲となることを良しとはできなかつたのだ。

「もちろんだとも。脈々と続いているこの世界を終わらせたくはないさ」

ストラテジストは一哉の質問に力強く答えた。この世界を終わらせたくない気持ちは同じだった。この世界ではできなかつたことを、あの時と同じことをすればいいだけなのだ。

*

僕は帰れないだろう。優しい父さんと母さん、そして大事な人だつていたのに。

僕はあの世界に帰ることが出来ない。

主君を見捨てて逃げるなんてこと、優しい父さんなら許してくれただろうけど、騎士の息子として僕が僕を許せなかつた。独りで死なせたくなんてなかつた。

そういえば、これ、僕にはもう要らないものになつてしまった。剣に括りつけていたお守りがわりの水晶玉を外した。

「これを、彼に渡してくれないかな」

水晶玉を近くにいた騎士見習いの新人兵に渡して下がらせた。

あの世でお義父さんに会ったら怒られるかな。俺の娘を悲しませない、幸せにするって言つてたよな!! なあ!! 親より先に死ぬやつがあるか!! なんて、詰められたして。

でも、きつと最後には「よく頑張ったな」って褒めてくれるんだ。

*

夜。一哉とストラテジストは街に繰り出した。

あの後、簡単に作戦会議をし、今日は街の巡回を手分けし、バーサーカーの情報を集めることとなった。俺の担当は市街地だ。

夜半だというのに街はまだまだ明るく、人通りも多い。見上げたビルの窓にはまだ明かりがついている。

「さすがにこんな街中で魔術を行使するやつなんているのかな」

「まあ、いらないだろうが、視野を狭めるのはよろしくない。可能性が一つでもある限り捨ててはいけない」

現代の街が気になると言つて、今晚のストラテジストは現代服に身を包み、実体化している。

金銭は一哉持ちだったが、選んだのはストラテジストだ。細身のスキニーデニムと

ジャケット、首元のストールがアクセントとなっている。スタイルがいい人は何を着ても似合う。

「どうしたんだ？」

「いや、知り合いに似ている気がして」

足を止めたストラテジストに合わせて、その視線の先を見れば、ストラテジストに少し似たイケメンがナンパをしていた。

どうにもいい雰囲気で、このままお茶にでも行きそうだ。

ストラテジストはぐんぐんとそのナンパ現場に歩いていき、その間に割って入った。イケメンの手首を鷲掴んだ。なにやっつてんだストラテジストは。

「げ……！」

俺にも聞こえるくらい露骨に嫌な声を出したイケメンは抜け出そうとしているがストラテジストの右手はピクリとも動かない。

仕舞いに、ストラテジストはイケメンの腰を抱き寄せ、俺たち恋仲なんですアピールをして女性を下がらせた。本当になにやっつてんだストラテジストは。

そしてそのまま、流れるように口論へ発展。正直、あの中に入っていく勇氣も自信もない。

目の前の光景に嫌気がさして、見上げた空には一匹の竜。くるり、くるりと街の上を

飛んでいる。ん？竜？

「なあ、ストラテジスト、上に竜が……」

「竜?!」

俺の声と竜に気を取られたストラテジストの隙をつき、イケメンはその手を振りほどいて、逃げた。それはもう、すごい勢いで。

その身にはエーテルを纏い始め、瞬きの瞬間には服装が変わっていた。現代服のそれから、口布を巻いた忍装束のそれへと。

「待てや!!ごころあ!!」

「ぎゃーーー!!」

ストラテジストもまた、ストールを巻いた軽装鎧で追いかけていく。まるで鬼のようだ。怒号と悲鳴を置き去りにして二人は街を駆けていく。

いくら派手さに欠ける宝具でも街中で展開なんて、冷静さを失つてるとしか言えない。

冷静さを欠いたストラテジストを俺は隠匿の魔術で身を隠し、強化した足で追いかけるしかなかった。

*

追いついた先は街の外れからその全貌を見渡せる高台公園で、月と風車が俺たちを見下ろしている。

ストラテジストはイケメンを押し倒し、マウントを取った。花畑は無残にも踏みつけられていた。

この状態に持ち込むまでに相当もみ合ったのか、二人揃って肩で息をしている。

「あいつを悲しませない、幸せにするって言ってたよなあ!!」

ストラテジストは相手の胸ぐらを両手で掴んで締め上げた。

「何勝手に、死んでやがんだ! あいつは、あいつは、お前と一緒にいたいんだと幸せそうな顔で報告してきたぞ!! お前はそれを! それを!!」

「人違い、ですよ」

ストラテジストの凄まじい剣幕とは対照的に、彼は凍りついたような冷めた顔で返した。

「人違い、です」

淡々と返す彼の言葉はストラテジストに油を注ぐだけだった。

「俺は軽薄そうで軟派なやつ、お前以外にいるとは思えないんだがな」

「それでも、人違いですよ。きつと」

ストラテジストは右手を離し、その手を拳へと変えた。

蚊帳の外の俺から見て、ストラテジストに馬乗りになられている彼は、殴られたがっているように見えた。罰してほしいと思っっているような。

彼は諦めたように、目を閉じた。

その行動がストラテジストの雰囲気ガラリと変えた。禍々しいオーラのようなものを纏い始め、それは背中でゆつくりと蝙蝠の羽のようなものに姿を変える。ついには尾っぽのようなものまで形成し始める。オーラを纏ったストラテジストはまるで、竜のようで……

彼をギロリと睨む瞳は澄んだ青ではなく、どす黒い夕焼けに変わっていた。それは、きつと破滅ぜつぼうと絶望のみらいの色。

気が付けば魔力が凄まじい勢いでストラテジストに供給されていく。立っているだけの力もなく、ストンと腰から落ちた。

このままではストラテジストは暴走する。どうすればいい。どうすれば……

右手の令呪の存在を思い出した。生まれた時からある痕に絡まるように現れた令呪。これを使えば止められるかもしれない。

「令呪を持って命じる！ ストラテジスト、暴走をやめる!!」

令呪は開放され、魔力となってストラテジストに絡みつくが、その暴走を止められる

ほどの力ではなかった。一哉の力だけでは止まらない。

「僕はサーヴアント、アサシン。二度と蒼穹で咲けぬ花。いいんですか？アサシンとこんなに距離が近くて」

彼ーアサシンのささやくような声にストラテジストは飛びのいた。一哉の令呪はアサシンから距離を取るだけの冷静さは与えられていたようだ。

ストラテジストはゆつくりと元の冷静さを取り戻し、禍々しいオーラはなりを潜め、瞳もその青さを取り戻した。だが、暴走の反動か、どこか呆けている。

「サーヴアント、アサシン……？」

「ええ、僕はアサシンですよ」

暴走化にあったからか、アサシンの名を確認するストラテジスト。ちよつと試案する顔をしてから、街中の時と同じようにアサシンの腕を鷲掴んだ

「ちよつと面貸せよ」

にやりと口の端をつり上げて笑った顔は明らかに救国の英霊にあるまじきそれで。対象は一哉ではないというのに、思わずぞくりと背筋が凍る。

その日、二回目となるアサシンの悲鳴がこだました。

5話 暗殺者／Class change

お昼休み。今日も今日とて、俺達三人は中庭で昼食をとっていた。昼休みにここで昼食を取りながら作戦会議するのが同盟二日目にして決まり事となりつつあった。

「笑顔のストラテジストさんは後にして、僕から報告しますね」

あかりの言う通り、にこにこ笑顔のストラテジスト。本日の報告会は実体化しての参加のため、見てわかるレベルで機嫌がいい。

「僕たちは昨日、ランサーと遭遇しました。こげ茶色の髪の偉丈夫で、アーチャーと知り合いのようでしたが、公平じゃないからと真名は教えてもらえませんでした。ただ、ランサー陣営は前日にセイバーと戦っていたようで、少しだけ情報をいただきました」

「それって、黒馬の剣士じゃないの!?!」

あかりが報告しているところへ、明石さんが食い気味に割って入った。

「は、はい。黒馬に乗った騎士で、上から下まで真っ黒で手に持った剣だけが怪しく光っていたそうです」

「それよー!」

あかりの報告と自身の遭遇したものの類似点の多さに明石さんのテンションは上

がっていく。対してキヤスターのそれは下がっていく。

「キヤスター、よかったら飲む？」

降下していくキヤスターを見ていられず、俺は思わず声をかけてしまった。

本日、水筒の中身はお茶にあらず。昨日のキヤスターに触発されて豆腐の味噌汁が入っていた。みんなで分けられるようにと紙コップも持参している。

まだ暖かく湯気の上立てるそれを紙コップに注ぎ、キヤスターに手渡した。

「昨日、図書館で読んでいたから気になったのかなと思って」

「あ、ありがとう」

キヤスターは目を白黒させつつも口を付けた。

舌で転がしながら、ゆっくりと味わっているようで、作った側の人間としては嬉しくも気恥ずかしい。僕にも！と言わんばかりに無言で差し出されたアーチャーの手にも手渡し、俺にもくださいと無言で訴えるストラテジストにも、渡そうとして渡さなかつたりと多少のイタズラはしたもの、最後には渡した。昨日令呪を切らされたお返しである。

「やさしい味だね。おいしい……」

「そうかな。口に合ったならよかった」

俺ははみそ汁をすすりながらも、黒馬の剣士について耳を傾ける。

得られた情報としては、黒い鎧に揃いの馬、怪しく光る剣を持った騎士だという。

ランサーと会った時に「はじめまして」と言つて襲い掛かつてきたそうだ。凄まじい強さだったが、どこか力を試しているようで、撤退することは可能だったという話だった。

そこに疑問符を付けたのは明石さんだった。

「私とキャスターの時は全力全開つて感じてそんな暇なかつたわよ……」

切りたくなかつた令呪だつて切つたんだから。

明石さんの手にあつた令呪はその輝きを一つ失つている。一画使つて退却しかできなかつたのだから、悔しくもあるんだろう。

「私からの報告はさつきセカンドマスターの黒馬の剣士と戦闘したことよ。令呪一画使つて退却するので精いっぱい。マスターはこの街の管理者、清水暁しみずあき。この街で魔術師をやっている以上、知らないわけないよね」

その場に沈黙が満ちた。明石さんの言う通り、この街で魔術師をやっている以上、知らないわけがないのだ。この街の魔術師を束ねている大地主で、清水暁に申請することで魔術師としてこの生きていける。

俺だつて両親が消えて、魔術を継いだ時に会っている。どこからその情報を手に入れたのかわからないが、唐突に現れて手続きをさせられた。あのすべてを見透かしたよう

な瞳が苦手だった。

最初に口を開いたのはストラテジストだった。

「その清水暁ってというのは、どんな人物なんだ？」

「食えない人よ。「おやおや、まあまあ……」が口癖で、この街のことゼーくんぶ知ってそうな」

「僕も不思議な印象をうけました。こちらのことをすべて見透かしたような行動をとりながら、あの人自身の情報は何一つ開示されない」

「俺、両親が消えたこと誰にも言っただけでなかったし、その翌日から普通に学校に行ってたんだ。なのにあの人はその調度一週間後に手続きで俺の前に現れた」

「つまり、情報らしい情報はない……」

「そういうことだ」

マスター三人そろって魔術師で、清水暁と面識があるはずなのにこれである。

「あの清水暁に最優と呼ばれるセイバーとおぼしきサーヴァント。どこかで自滅か相打ちでもしてくれればいいのに」

「マスター、そんなこと願ったって意味はないだろうに」

明石さんの言葉は願うだけなら容易い、この場のマスターの気持ちを代弁したものだ。しかし、キャスターのいうことももつともだった。

そんな奇跡のようなこと、願ったところでどうにもならないし、願いを叶えることができるこの戦争に参加しているだけでも奇跡のようなものなのに。

「とりあえず、今はバーサーカーに集中しませんか？一哉くん達の報告もありますし」

あかりの言葉に、待ってました！とばかりにストラテジストは指を鳴らした。

「俺達からの報告は一つだ。紹介したい人がいる」

ストラテジストの声に合わせてソレはストラテジストの隣へ姿を現した。

霊体化の解除とは違う現れ方に全員に動揺が走る。

口元を覆う長いストールに小さい胸当ての軽装備の男だ。銀灰色の髪は手入れが行き届いており、見目を気にする人物のようだ。

「サーヴァント、暗殺者^{アサシン}。よろしくお願ひします」

アサシンと名乗った男は立ち上がり、手を胸元にあてて優雅に一礼を取った。

「なんだか、胡散臭い」

「軽薄そうな方ですね」

「ナンパでサボったら許さないよ」

「アサシンだね。よろしく！」

上から順に明石さん、あかり、キャスター、アーチャーだ。

まったくもって酷い評価だが、俺は否定する材料を持ってなかった。昨日の出会いの

時点でナンパしていたのだから。

「それに、どこかで見た顔だ」

「えー人違いですよー」

キャスターの言葉にへらへらとアサシンは笑う。昨日の夜見せた冷たい顔とはまた違う。

「交渉してバーサーカー撃破までの間だけ、アサシンを借りてきた」

「借りてきたって……」

「僕の腕を買ってくれているのか、マスターは最後の一騎になるまで戦争を放置するみたいなんですよ」

ストラテジストの言葉に啞然とする明石さんに、アサシンは補足する。

「僕としても、情報収集とか命じてくれた方がやりやすいんですけど、完全に放任されちゃって」

「それで日がな一日ナンパしてると」

「ちよつとかかわいい女の子をお茶に誘っただけですよー」

明石さんもあかりも突然のアサシンに信用していいのか迷っている。俺は別にそれで構わない。利用できるものをその時に利用するだけでいい。

俺だって、これで本当に良かったのかわからないのだから。

*

結局、誰一人としてバーサーカーの居場所を知らないまま、再び夜になった。今晚は待ち合わせをして全員で探索をする。

待ち合わせ場所は街を大きく二分する川の河川敷だ。ここで待ち合わせをし、学校のある東側を搜索する。

待ち合わせ場所にいるのは俺とストラテジスト、アサシンの三人だけだ。手持無沙汰なアサシンは拍を取りながら踊りを披露してくれる。観客は俺一人で、手拍子で応えた。

優美で流れるような踊りの中に男性特有の力強さも感じられるいい踊りだと思う。俺は踊りなんて嗜んだことがないから、よくわからないが綺麗だった。

歌があればもつといいのに。

俺がそう考えた時、隣から歌が聞こえてきた。低く、踊りに合わせた流れるような歌声。ストラテジストの歌だった。

魔術師が跋扈し、戦争の行われている夜の河川敷で、男ばかり三人も集まって何してるんだか。でもその滑稽さもまた面白い。それになにより、アサシンの踊りもストラテ

ジストの歌も素晴らしいのだ。

「夜中になにしているの?」

この素晴らしい時間も長くは続かず、明石さんの呆れたような声で打ち止めとなった。後ろにはキャスター、あかり、アーチャーの三人もいる。

「いやちよつと、アサシンの踊りが綺麗でつい、見入ってしまった」

「いやなに、アサシンの踊りが優美でな、つい歌を」

上から順にマスターとサーヴァントの言葉。踊っていたアサシンはといえば――

「は、恥ずかしいです……」

俺やストラテジストだけではなく、ほかにも見られていたのが恥ずかしかったように、顔を真っ赤にしている。

そんなアサシンを冷たい目で見据えていたのがキャスターだ。赤褐色の瞳を細めている。どうかしたのかと聞けば、なんでもないとはぐらかされた。同盟を組んでいるものの、俺は彼のマスターではないのであまり深くは口を出せない。ただ、キャスターはアサシンのことを気にしているのは確かだった。

「さて、今日はバーサーカー探索の為、あわよくばそのまま撃破を見据えて全員で集まったわけだが、俺は別行動させてもらおう」

「え!?なんで!!」

ストラテジストの声に明石さんの抗議の声が飛ぶ。そして視線はもれなく俺に。「悪いが俺は何も聞いてないぞ」

弁明をすれば視線の種類が、大丈夫かこの陣営……といった生ぬるい心配の視線に変わった。

まあま落ち着けとでもいうかのようにストラテジストは手を動かした。

「答えは俺一人のなら、空から搜索できるからだ」

ストラテジストは声高に宣言すると宝具を展開する。いくら宝具からその真名が分かりづらいとはいえ、いくら魔力消費が少なめだとはいえ、マスターとしてはそう頻繁に展開してほしくはないものだ。っていう俺の気持ちは一切伝わってないんだろ。このサーヴァント。ましてや、同盟相手を目の前にして宝具名すら口にする。

「数多クラステンジの可能性!!」

魔力が風を呼びストラテジストのコートを翻させる。コートはその裾からエーテルへと溶けていき鎧へと変わっていく。はいていたブーツは足甲へ、皮の軽鎧は鈍色の鎧へ。

突然、影が差し頭上を見上げれば一匹のドラゴンがいた。

——ドラゴン。

神代の幻想の中へと姿を隠したソレが、今日の前で月を遮っている。

ドラゴンはふわりと羽をはばたかせ、優雅にストラテジストの傍に降りた。

「愛竜のジルだ。よろしくしてやってくれ」

「すごい！ドラゴンだ!!」

無邪気なアーチャーだけがドラゴンに駆け寄りストラテジストと会話を弾ませる。

他の面々はと言えば、あかりは目を大きく見開き呆けて、キャスターは数多クラステュエンジの可能性が気になるのか思案気な顔だ。アサシンは出会った時の様な冷たい顔で二人と一匹を見ている。それで、残った明石さんは――

「はわわわわわわわ」

腰を抜かしていた。

本当に大丈夫か彼女。

今度は俺が彼女に生ぬるい心配の視線を送る番だった。

手を貸して立ち上がらせてあげても未だ「はわわわ」しか言わない。右手でしっかりとドラゴンを指さしながらぶんぶんと振り回している。こちらを見つめる瞳は説明を求めていた。

「数多クラステュエンジの可能性。ストラテジストの宝具の一つで、自身の霊基を疑似的に一時だけ変え

るんだ」

「ずずずずずるくない!?!」

「ずるいも何も、クラススキルの変更と見た目、ステータスが若干変更されるだけで、とくになにかあるわけじゃないし」

「いやそれでも、歩兵のストラテジストがドラゴンに乗ってるとか誰が考えるの？ 攪乱はできるでしょう！」

逆にそれぐらいしか使い道がないともいう。どんな状況に陥っても決して諦めない道を探り続けるストラテジストらしい宝具といえそうなんだが。

ちなみに、七つの基本クラスにはなれるとは自己申告。なお、審議は定かではない。「ほら、俺は宝具の一つを開示したんだから、お前たちもざっくり概要ぐらいは教えてくれないか？ 戦術に組み込みたいんだ」

ストラテジストの拍手に全員が我に返った。

夜は長いが短くもある。神秘に携わる魔術師として、ドラゴンの登場やストラテジストの宝具に呆けている場合ではないのだ。

自身の宝具切り札を先に開示することで、他のメンバーにも開示を強要する。そういう作戦だったのだろうか。相談くらいしてくれてもいいものを。

「僕の宝具はこの魔術書を使ったものだ。足止めと攻撃系だと考えてもらえばいい」
ストラテジストを軍師として認めたのか、先に開示したのはキャスターだった。

「ほかに？」

「馬もあるが、こちらは機動力のみと思ってほしい。攻撃に転用したりはできない」
「情報の開示に感謝する。それで、アーチャーは？」

ストラテジストは優雅にキャスターに腰を折った。対するキャスターは目礼だけでそれを受け取った。まるで頭を下げられ慣れているかのような。人の上に立つものの気配がした。

「アーチャー？」

アーチャーはストラテジストの言葉に座りが悪そうに笑っている。マスターは深刻そうに考えていた。深刻顔をしたあかりの顔に影が落ちる。

少しの躊躇のあと重い口を開いた。

「実は、アーチャーは現在、宝具を開放できないんです……」

6話 fall down fall down

俺たちはその後、ストラテジストと別行動をとり、六人と大所帯で移動していた。

先頭を歩いているのはアーチャーで気分でもいいのか鼻歌を歌っている。宝具を開放できないという戦争に参加するにあたり、致命的な弱点を抱えているがアーチャーは些細なことと思っているのだろうか。このままではスキップでもしそうな勢いだ。

続くのは明石さん、あかり、俺の三人だ。最後尾をアサシンとキャスターが歩いている。

「まさか、宝具が開放できないなんて……」

「はい。アーチャーの心的なもので、それさえ解消できれば大丈夫だとは思っているが」
勇気をだして申告したマスターのあたりはアーチャーと対照的に沈み込んでいる。無理もないだろう。宝具とは英霊の切り札だ。それが現在切れないというのは、戦争に負けることと等しい。一刻も早い回復が望まれた。これからも一緒に戦うあかりも、そして対バーサーカーとして戦力が欲しい俺達も。

「ストラテジストが何か策を考えてくれているさ」

「ええ、一哉くんが信頼しているのを見てみると、僕も信じられます」

「だから、そんなに暗くならなくてもいいんじゃないか？」

「そう、ですね。アーチャーの明るさを見習わないと……！」

「いや、あれは底抜けすぎるわ……」

俺たちは戦争中なことが嘘のように笑いあった。同じ年で同じ学校で、きつと出会いさえ違えば友人としていられただろう。ただ、戦争が俺たちを繋いだんだ。聖杯戦争がなければ、出会うこともなかった。

*

最後尾を歩くキャスターとアサシンは無言だった。足音だけがその場に響いていた。その無言に耐えかねたアサシンが口を開く。

「えっと、僕の顔になにかついていますか……？」

「いや。知り合いに似ている気がしてね。気分を害したのなら謝るよ」

「いえいえ、そんな！それに、人違いとか、気のせいですよ。こんな顔、たくさんいます」
「こんな軽薄そうで軟派な顔、そんなにいないと思うんだけど」

アサシンは自身の顔をつねってアピールしてみたが、キャスターには効かなかった。アサシンの背に嫌な汗が伝う。

正直、アサシンは困り果てていた。たどった歴史は違うだろうが、知人であることが

ほぼ確定してしまっている。証拠はあった。今晚は実体化し現代服を着ているが、キャスターのコートの襟がひっくり返っている。襟が内側に向かつて折れていた。こんな着方、あの人の弟君ぐらいだろう。ストラテジストの時も気のせい勘違いで押し通したのだ。ここもそのまま押し通させてもらいたい。

*

「……！」

「ちよつとー！」

消えてしまったソレに思わず足が止まった。明石さんに言われずともマスターの俺が一番わかっている。

どうしよう。どうしよう。どうすればいい、ストラテジスト。

ストラテジストの魔力が消えたんだ。

「僕が探してこようか？」

最後尾を歩いていたキャスターが提案してくれるが、それどころではない。念話で呼びかけるも応答は一切ない。

「ストラテジストの魔力が消えたのは神社方面です！行きましょう！」

あかりの声に引きずられるようにして走った。

終いには腑抜けてしまった俺を見かねたキャスターが霊衣を身にまとい、馬に乗せてくれ、先行してくれた。川辺を駆け、住宅街を抜けて行く。その間も念話を試み続けた。

(ストラテジスト……！ストラテジスト……！)

(そんなに呼ばなくても聞こえているさ……)

ようやくと通じた念話に心の底からほっとする。

(心配したんだぞ!!)

(それはすまなかつた。バーサーカーに撃ち落とされてな。詳しくは直接話す。すまな
いが山の上の神社に来てくれ)

(わかつた)

ストラテジストとの念話を切り上げ、キャスターには山の上にある星夜神社ほしよるじんじやに向かうよう伝える。キャスターは快く受け入れてくれた。馬の脚は住宅街を抜き去り、大通りへ移り、まっすぐ神社を目指す。

ああ、そういえば。ストラテジストの魔力を探るのではなく、レイラインを辿ればよかつたと今更気づいた。細く細くなってしまったが糸は確かにつながっていた。なくなつてなどいなかつたのに。

(ちなみに、バーサーカーの狙撃に気をつけろ)

思い出したように付け加えられたストラテジストの言葉。疑問を浮かべる前に答えがわかってしまった。左から矢が飛んできて、すぐそばを通り過ぎ、アスファルトに突き刺さった。

付近にバーサーカーの気配はなく、方角的には学校から飛んできたものだが、どこから狙われているのか見当もつかない。

こんな精密射撃、バーサーカーの狙撃精度じゃないだろう！

「キャスター！どうにかならないのか！」

「あいにく僕はキャスターだね。狙撃されている矢を撃ち落としながらの早駆けは無理だ。君が何とかしてくれ」

なんとかと言ったって、こちらはしがない魔術師でできることは限られている。

しかし、こうしてストラテジストも生きていた今、諦めるわけにはいかない。ストラテジストの願いを叶えてやるためにも。脱路するわけにはいかない。

背負っていたショートスキーケースを開ける。中には我が家に伝わる宝剣が入っている。それを右手で構えた。片手で構えるには重いが腕に強化の魔術を施す。

(教えた通りにやれば大丈夫だ。タイミングは俺がとろう)

思い出せ。ストラテジストの教えを。

まずは剣に魔力を通す。帯電すれば魔力が通った証で待機状態でもある。

(いまだー！)

そして、目標に向かってタクトのように振る！

「雷よー！」

剣から雷がほとばしり、矢を焼き尽くす。響き渡るはずの雷鳴がいつまでたつても来ないことに首を傾げていると、なんの魔術も施さず、馬を走らせていると思っていたのか！と前から怒られた。面目ない。

(そら、続々くるぞ)

ストラテジストの言葉に空を仰ぎ見れば、たくさんの星に紛れるようにして点在している赤く禍々しい光があった。あれらはすべてバーサーカーの放つ矢だ。

あまりの多さに顔を引きつらせるしかなかった。

雷を呼び矢を弾き、山を駆け登った先に鳥居が見えた。勢いそのままに駆け込めばピタリと矢が止んだ。

この星夜神社は山の上であり、街が見渡せるようになっていいる。背後には山脈が連なり、街境まちぎかいにもなっている。小さな社と狐と犬の狛犬があるぐらいの小さな神社だ。先ほど登ってきた心臓破りで有名な階段もあるため、あまり人が寄り付かないのではと思っていたががそうでもないらしい。適度に清掃され、手入れが行き届いているのがわかった。

小さな頃は学校終わりにここまで走ってきて、遊んだりもしていたっけ。水色の髪をした女の霊がでるとか噂もあって、夏場は肝試しスポットでもあった。

社の賽銭箱の向こう側、中へと続く扉の前にストラテジストは倒れていた。宝具は解け、いつものローブ姿だ。矢で貫かれたのか、あちらこちらから出血の跡が見て取れた。

「頼むから、応答くらい、してくれ……」

「すまん。気絶していた」

「サーヴァントに気絶なんてあるのか？ まあいいや。傷を見せてくれ」

「傷ならこの社の主が治してくれてな。もう塞がっているんだ」

広げて見せたコートの中の傷は血も止まっている。傷は塞がったものの、動けるだけの気力がなかったのか。ストラテジストが立ち上がり、埃を払えば、コートの穴も消えた。エーテルで編まれたコートだ。直すのも一瞬だ。

「さて、由紀たちが来てから紹介しよう。説明もすべてそこで」

*

「あわわわわわわわわ」

矢の嵐の中、神社の階段を明石さんとあかりが駆けあがってくるのが見えた。殿は

アーチャーが務めており、手に持った弓で応対している。器用なもので降り注ぐ矢の対応をしながら、バーサーカーに矢が届かないか試しているようだった。あいにく、それも射落とされているようだった。

三人そろって鳥居をくぐれば、俺たちの時と同じように矢は止んだ。ストラテジストの言うこの社の主の力だろうか。もしくはギリギリ、バーサーカーの射程圏外なのか。英霊であるアーチャー以外の二人はそろって肩で息をしている。明石さんなんてそのまま倒れ込みそうな勢いだ。あかりも自身の膝に手を置き、辛うじて立っているような状況だ。

「いい運動になったねー！」

アーチャーがいい汗かいたとばかりに額の汗をぬぐった。

「なるかあつ！あなた、野生児かなにかつ……？」

「アーチャーは野生児、です……」

明石さんが食って掛かったが、アーチャーの真名を知っているあかりだけがそれにツッコんだ。いや、事実だったとしてもフォローになつてないと思うぞ。

「キヤ、キヤスター……こんなの、聞いて、聞いてないよ……」

「警告はしたはずさ。バーサーカーの射撃に注意して星夜神社ほしよかみじままで来てほしいと」

「だからって、心臓破りの大坂を休憩なしで走り抜ける羽目になるなんて、誰が思うのよ

!!

ごもつともである。

さっきの俺も同じ感想だった。違うとすれば、彼女たちは自身の脚で、俺とキャスターは馬で登ってきたことだった。大違いである。

「ほら、ストラテジストが説明してくれるんだから、コントは後にしてくれないか」

声をかければ、すぐさまやめ、全員がストラテジストのほうに向きなあった。みんな、何がどうなったのかを知りたがっている。

「まず一つ目。上空からドラゴンに乗りバーサーカーを探していた俺だったが、見事に撃ち落とされた」

「馬鹿じゃないのかい」

滅多にしない自身の失態にくすくすと笑い続けるストラテジスト。俺もキャスターと同意見だ。馬鹿じゃないのかこいつは。

「バーサーカーの居場所を掴みかねていたところで、射程に入り込んでしまった。墜落を覚悟した時点でジルは還した。この山の中に落ちて、なんとか社までたどり着き、治療してもらったというわけだ。それで、治療してくれたのがこの社の主である彼女だ」

ストラテジストの視線の先、正しくは彼の背後、そこにころりと小さな竜がいた。自身の身の丈ほどもある丸い水晶玉を抱えており、水色と白のまだら模様、赤い額と手

足を持っている。尾っぽは金魚のように優雅だ。

ストラテジストの後ろから、ちらりとこちらを覗いただけで、出てくる様子はない。「ああ、助けてくれてありがとう。本当に助かった」

「ストラテジストさんを助けてくれてありがとう！」

ストラテジストとアーチャーは楽しげにその竜を交えて会話しているが、竜の言葉は聞き取れず、会話が穴抜けで疑問が浮かぶ。あかりに視線で問うても首を振られてしまった。

あの竜の声が聞こえているのはアーチャーとストラテジストだけのようだ。

「それで、二つ目だが、バーサーカーの居場所が分かった」

「撃墜されたおかげで？」

「そう、撃墜されたおかげでな」

ストラテジストは俺の嫌味を意にも介さない。お前ほんと図太いな。

「場所は、お前たちの通う白柳高校。はくりゅうこうその屋上にいる」

白柳高校。はくりゅうこう街の東側に位置している、俺たちの通う公立高校だ。この神社の北西の高台の上にある。田舎特有の敷地を持って余した大きなグラウンドが特徴的だ。校舎にたどり着くには螺旋状に高台を巻いている坂を上らなければならない。

「高台にある高校の屋上にいられては、手が出しにくいですね……」

「目算だが、今のバーサーカーの射程距離は高台の見晴らしのよさも含めて川を超えた市街地まであるだろうな。さすがに風車公園までは届かないだろうが」

「ひとまず、アサシンにはこのまま単独で暗殺に動いてもらう」

ストラテジストの視線に頷くとアサシンはその身を闇に溶かした。

「これが決まればいいが、そうではなかった時の為にも俺たちはこのまま正攻法で近づき、撃破を試みる。俺と一哉は以前話したように前衛で囷だ。バーサーカーの気を引くことが仕事だ。キャスターとアーチャーは俺の後ろを進んでくれ。適宜俺がカバーしきれなかった矢を頼む」

他に質問は。ストラテジストの言葉に皆が皆、口をつぐんだ。

作戦決行だ。

7話 moonlight blue

アサシンは夜の闇を駆けていた。霊体化し、気配を薄く薄く引き伸ばして遮断して、
白柳高校に居座るバーサーカーの元を目指す。

あの人の指示のもと、もう一度一緒に戦場を駆けられるとは思わなかった。青空の下
ではないことだけが悔しい。もう一度あの空の下へ、仲間の元へ帰るんだ。

アサシンは矢の雨を受けずに高校のふもとにまでたどり着いた。そして宝具を展開
する。

月下の花^{ムーンライトブルー}

青空の下へ帰れず、暗い夜の国で息絶えることになったアサシンの死に様が具現化し
た宝具だ。騎士であつたアサシンが暗殺者となつたのは、かの人に仕えてから、すなわ
ち暗い夜の国での出来事。夜の間のみ気配遮断スキルのランクを大幅に上げ、暗殺の確
率にも補正が入る。

校舎に向けて螺旋を描く坂を走る。さすがにこれくらいで息をあげたりはしないが、
生身の人間にこの走り込みはしんどいものがあるだろう。後々この坂を上ってくる羽
目になるマスター達には同情する。

校門を飛び越え、順調に校舎内へと潜入を果たした。あまりにも上手くいきすぎている。不安に苛まれながらも上を目指す。

校舎は昼間の喧騒とは反対に静まり返っていた。何百人と人のいた場所に人の気配はほとんどなく、不気味さがより際立っている。

屋上にはバーサーカーとそのマスターらしき女性がいた。こんな真夜中に制服を着て柵の向こう側に立っている。まさか飛び降りる気なのだろうか。それはそれでこちらには好都合ではあるものの、寝覚めが悪い。

「私なんて、いない方がいいんだ。いつもいつもできないいい弟と比較されて、愛想も振りまけず、誰からにも必要とされず、誰にも愛されず、ただただ消費して、私なんて私なんて」

彼女の口から漏れ聞こえる呪詛が風に乗リ、アサシンの耳にまで届く。

よくよく二人を観察してみれば、マスターであろう彼女はバーサーカーに精神が引つ張られていることがわかる。バーサーカーとのリンクが彼女を負の連鎖に陥らせている。ならばバーサーカーを仕留めてリンクを切れれば、彼女はまた明るいところで生きられるのではないか。

アサシンはナイフを構えて、月の下へと踊りだした。バーサーカーとの距離は目算で約数メートル。バーサーカーの背後を取り、ナイフを突き立てようとした。そのとき

……

ぐるり。バーサーカーがこちらを振り向き、弓を構えた。こちらをまつすぐと射抜く赤い目と目が合ってしまった。

失敗した……！

暗殺が失敗した際には速やかにその場から離脱しよう、ストラテジストからは重々言い含められている。だが、さすがにこのままでは退避ができない。退避しようと移動した瞬間、射抜かれて終わりだ。また僕は帰れないのだろうか。

諦めない。

ストラテジストに持たされていた宝珠を使用する。銀色の装飾の施された赤い宝珠だ。それを空高く投げる。宝珠は光り輝き、バーサーカーの視界を一瞬だけ奪った。

身軽さを優先させた忍装束は溶け、見慣れていた鎧へとその姿を変える。口を読まれないためにしていた口布ももう必要ない。亜麻色の髪が揺れた。

宝珠の効果で傍に来てくれた馬に跨り、屋上を飛び降りた。

後を追うようにバーサーカーの禍々しい赤い矢が校舎を走り抜けるアサシンに降り注ぐ。

アサシンは空を仰ぎ見て矢を確認すると、それらすべてを回避した。馬を操り校舎を抜け、坂を下る。こちらに向かっているだろうストラテジストたちへとまつすぐに走つ

た。

*

一方、一哉達は高校への道を最短距離で移動していた。あとはこの道をまっすぐ行けばふもとへとたどり着ける。しかし、その靈基をシールダーへと変えたストラテジストに合わせるように牛歩の進みだった。

バーサーカーがこちらを見つけていないのか、はたまた別の物事に気をやっているのかはわからないが、現状矢の雨は止んでいる。

「なあ、ストラテジスト。今のうちに進めるだけ進んだ方が……」

「来るぞ……」

一哉が進言したその時だった。

空に赤い星が増えた。一つ、二つでは済まない量。既存の星を覆うほどの量だった。空が赤く染まる。

ストラテジストは足を止め、大きな盾を構えた。全員、矢を避けるために盾の蔭へに入る。この大盾を持つての進軍だったため、足が遅くなっていたのだ。

道の向こうに影があった。それは凄まじい速さでこちらへと走ってきていた。馬を

駆るアサシンだった。

バーサーカーの矢はもう目前まで迫ってきている。その勢いはまだ緩いもののぼつぼつと振り出している。

矢の一つがまつすぐとアサシンを捉えた。

間に合わないのだろうか。彼を助けるにはどうすれば。雷を呼ぶか。いや、剣を振るという呼び動作が必要だ。もう間に合わない。

アサシンは自身を狙っていた矢を手を持った剣で叩き落す。駆け抜ける勢いそのままに大きく飛んだ。ストラテジストの大盾を超えて、一哉達の頭上付近で馬はエーテルに溶けてしまった。漂うエーテルを縫ってアサシンが大盾の影に滑り込んだ。

途端、バケツをひっくり返したような矢の雨が降り注ぐ。

「ごめんなさい、失敗しました……」

アサシンは眉尻を下げて報告した。アサシンが成功していれば、直接正面切ってバーサーカーと戦う必要もなかったのだから。

「いや、よく頑張ったな」

「……はい!!」

ストラテジストは大盾を構えているため視線を外すことはないが、アサシンの報告に褒めて返す。盾を支える右手でアサシンを傍に招いた。その手は亜麻色の髪へと差し

入れられた。わしわしと頭を撫でていた。

お互いの顔はわずかに微笑んでおり、どこか嬉しそうだ。

矢の雨をやり過ごし、また校舎を目指す。降り注ぐ矢は止まったものの、その矢はひたすらにストラテジストを狙い続けるようになった。

「ターゲットが俺に移った!!キヤスターとアーチャー陣営は坂を駆け登れ!アサシンは二組のサポートだ。一哉は俺と一緒に矢をさばきながら上を目指す」

ストラテジストの号令に一哉以外は走り出した。バーサーカーの矢は変わらずストラテジストを執拗に狙う。

二人で矢をさばき、どれくらい経っただろうか。しばらくしてバーサーカーの矢が止まった。かわりに上で地響きのような大きな音と武器と武器がぶつかり合う音がするようになる。

ストラテジストは再びその霊基を変え、いつものローブ姿に戻る。大盾は歪な形をした剣と黄色い魔書に姿を変えた。

「ターゲットが上に移ったな。俺達も急ぐぞ」

「ああー」

たどり着いた校舎と校庭はいつもと様相が違っていた。陸上部が走り込んでいた地面は細かい穴が開き、校舎の左右では地面が盛り上がり、屋上までの階段を形成してい

た。これ、明日には本当に直っているのだろうか。

屋上のバーサーカーはあの夜のように二人に増えていた。交互に矢を放つため、隙が無い。

あかりはアーチャーと行動を共にしており、バーサーカーの猛攻を二人でしのいでいる。

明石さんはキャスターの後ろに乗り、屋上を目指しているが阻止されている。

バーサーカーの攻撃は主にアーチャーが狙われていた。白髪に何かトラウマでもあるのだろうか。バーサーカーの猛攻により、二組は再び後退し始めていた。

「ん……!？」

何か気になることでもあったのか、ストラテジストは戦場にも関わらず考え込んでしまった。

その隙を狙ってか、バーサーカーの攻撃がこちらに移る。一哉はストラテジストの前に出て剣を振るう。雷が落ち、矢は届かない。

一つ、二つ、三つ。矢はこちらに飛んでくる。雷で落とすのが精いっぱいだ。キャスターとアーチャーも、もう一人のバーサーカーに抑えられている。

「アーチャー、あかり！一旦、後退してくれ。新しい策を伝える！キャスターとアサシンはその間耐えてくれ!!」

策を練り終わったストラテジストが声を張り上げた。各々、その指示に従う。姿を消していたアサシンも再び校庭に降り立った。

「そしてマスターにはこれだ」

ストラテジストに手渡されたのは先ほどまで彼が持っていた黄色い表紙の魔書だ。

「は？」

「もうそろそろ魔力に余力がないだろう。それなら魔力消費なしで使える。相性はいいはずだから照準を合わせて言の葉を乗せろ。作戦を伝えている間に矢が飛んで来たら頼む」

「お待ちせしましたー！」

こちらが異議を唱えようと口を開きかけた時、あかりとアーチャーがこちらにたどり着いていた。アーチャーが手に持っているのはいつもの弓だが、あかりの手にあるのは見慣れないものだった。細い木に細かく切った紙の帯のようなものが付いている。神事で見るとよなものだ。

三人の作戦会議に参加したいところだが、バーサーカーの矢が飛んできてそれぞれではない。

ストラテジストの言ったように照準を合わせる。魔力を込めずに魔書の伝えてきた言の葉を乗せた。

「トロンっ！」

先ほどまで剣を媒体にして落としていた雷とは比べ物にならないようなエネルギーの塊が飛んでいった。もうこれビームだよビーム。

魔力消費がなく、これだけの威力を持つているって良いことづくめかと思っただ、どうにもそうではないようで、回数制限があった。二十五回。それまでに作戦を終えるつもりのようなのだ。

バーサーカーのストラテジストを狙う執拗な攻撃は粘着質なだけでリズムが単調でタイミング自体は合わせやすい。

(あっ……)

しかし、単調なリズムに目が慣れきってしまい、矢を打ち漏らした。

ストラテジストへと魔力が強引に引つ張られる。ここにきての宝具大盤振る舞いに腰から落ちた。おかげさまで矢を避けることはできた。

「戦局を変える！」

ストラテジストの宝具同時展開に魔力をこっそり持っていかれ、意識を保つので精いっぱいだ。

俺の前に立つストラテジストは緑のローブを着ていた。七色の風に吹かれてローブの裾が翻る。手にはまだ見たことのない杖が握られていた。

8話 I love you

カムイ。カムイ。カムイ。カムイカムイカムイ。カムイ。

どうしてあの《女》はあちらを選んだんだろう。

あの女さえ来なければ母上は死ななかつた。あの女がこちらを選べばこんな戦争なんて起こらなかつたのに。戦争が起こらなければ、たくさんの民が死ななくてもよかつたのに。たくさんの人が悲しまなくて済んだ。

どうして、どうして、僕たちの味方をしてくれなかつたんだ……

「父上……!」

戦を前にして背後から声をかけられた。《彼女》そつくりの青い髪を持つ異界で育つた僕の大事な大事な息子。僕なんかよりずっと弓の腕がいい天才だ。

時の流れの違う異界で育つたため、僕の数年年下の弟の様だ。例え僕がここで刺し違えても彼がこの弓を継いでくれる。僕なんかよりずっといい名手になる。

傍にいた兵士に命じて彼を異界へと送り返した。

「いやだよ!!父上!!僕強くなつたんだ!強くなるから!!僕が守るから!!お願いだよ!!死なないですよ!!父上!!僕も傍で!!戦わせてよ!!」

聞いているこちらが痛くなるような悲痛な声をあげて彼は扉の向こうへ消えた。

本当は《彼女》にも戦線を離れて彼について欲しかったんだけど、ここに残ると押し切られてしまった。臣下として僕を最後まで守りたいと、言われてしまった。

そういうえば、僕が意地っ張りなばっかりに彼をまともに褒めたことがなかったことに気が付いてしまった。ごめんね、キサラギ。

スサノオ長城から見下ろしたあの女は敵国を表すような黒の鎧を着ていた。覚悟を抱えたまっすぐな赤い目に僕は落ち着かなくなる。

カムイ。カムイ。カムイ。カムイカムイカムイ。カムイ。

カムイ。カムイ。カムイ。カムイカムイカムイ。カムイ。

お前は、お前は、お前は、お前だけは、僕が倒してみせる。

たとえ、刺し違えたとしても絶対に僕が、この手で、殺してやる……！

憎い、憎い、あの女と同じ白銀の髪 of 弓兵が僕を見上げていた。――僕と揃いの琥珀色の瞳があの女と同じ覚悟を抱えてまっすぐにこちらを見ている。落ち着かない。落ち着かない。あの瞳で見つめられるのは、あの美しい白銀の髪が風になびくのは落ち着かない。見覚えのあるような顔つき、見覚えのあるような弓を持っているが、もう、思いつけないや。

黒馬を駆る金髪の男は殺す。後ろにいる女も殺す。銀灰色の髪 of 暗殺者も殺す。敵

国のやつは全部、僕が殺す。あの女と揃いの白銀髪カムイの弓兵も殺す。弓兵の傍にいる女も殺す。向こうにいる黒髪の男も殺す。白い髪の男も殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。

僕が僕が僕の手で殺す。絶対に殺す。

*

「あかり、走れるな?」

「はい。大丈夫です」

ストラテジストさんは杖を握りしめ、僕のマスターに確認を取った。マスターも緊張しているのか、祓串を固く握りしめている。僕は頷くことで彼らに返事をした。

大丈夫。僕がこの弓を信じていれば応えてくれる。これは本当は母上の役目なんだと思う。母上はここにはいないし、夜刀神だつてない。だから、僕があの人を取り戻すんだ。僕にだつて絶対できる。他の誰でもない、僕がやるんだ!!

ストラテジストさんは走り出した。校庭の中ほどで手に持っていた杖を大きく掲げる。杖は光り輝き、隣にいたはずのマスターをストラテジストさんの隣へと連れて行く。

「アサシン!」

「はー」

マスターは屋上目指して走る。先ほどまでバーサーカーを抑えていたアサシンがマスターに付き添うように影に入った。

運動が得意ではないマスター。いくらアサシンが横にいるとはいえ、屋上を目指す以上、危険であることに違いはない。

僕が傍に入ればいいのに。でもそれはできない。

僕に体は二つとない。僕がこの手であの人を止めたい。その願いをマスターは叶えようと頑張ってくれている。マスターの気持ちにも応えたいんだ。

手に持っていた弓が輝きを増していく。物理的に張っていた弦は解け、青緑の光が弦を成す。ありがとう、風神弓。

「お願ひしますーアーチャーー」

校舎の前、大地で作り上げられた階段の前でストラテジストと同じように、マスターが祓串を掲げた。

「七つの大難疾^難く消滅^即せん!!」

今度は僕のが光に包まれる番だ。マスターの持つアーティファクトにより僕はマスターの頭上に転送される。

きらきらと瞬く星が先ほどよりもうんと近い。吹き抜ける風も味方をしてくれてい

る。

泡のように浮かんでは消えていく儂い記憶の中で、いつかこんな風に対面したような。

褒めて欲しかった。素直じゃないから手放して褒めてはくれないかも。意地っ張りで捻くれていて素直じゃないけれど優しい人だって、僕も母上も弟だって知っているよ。だから、笑ってよ。

くるり。空中で体制を整える。足場だつてないけれど、この弓の前ではそんなこと関係ない。

矢を構える。向こうでは真つ赤な濁った眼を向けてくる者がいる。僕の大切な人の姿をしたなにか。もう、あそこにはいないことを僕は知っている。あれは形だけなんだつて。

落下していく僕の耳元で風がうなりをあげている。視界の端に母上と揃いの白銀の髪が揺れている。

「大好きだよ!!父上!!」

矢を番えていた手を離した。

矢が当たったのか涙でいっぱい目ではよく見えない。倒せていなかったのだとしても関係ない。僕は弓を直して、両手を広げてパーサーカーに落下する。伝えたいこと

がたくさんあるんだ。褒めて褒めてとせがんで、飛びついていく僕をちゃんと受け止めてね、父上。

どさりとバーサーカーの胸の中へ落ちた。ぎゅっと力強く抱きしめられた。その力強さに僕は息ができない。でも、殺意も憎しみも籠ってない抱擁はただただ、愛情にあふれて居る。

舞い散る青緑色のエーテルの向こうに優しい気な微笑みが見えた。大きな手で柔らかく頭を撫でられている。《琥珀》色の瞳を幸せそうに細めて彼は言った。

「よくやったね、キサラギ」

彼の肉体は僕の当てたところから解けてエーテルが漏れ出ていく。彼は僕の持つ風神弓に目をやると殊更幸せそうに微笑んで掻き消えた。

ふわり、ふわりと蛍のように浮かんでいく光を僕は見えなくなるまで見送った。

*

一哉はストラテジストに強引に魔力を持っていかれ、五体を投げ打って校庭に寝転がっていた。屋上の様子は伺えないが、音もなく戦闘が終了したのだろうとは思うが確定ではない。

「蒼井くん、生きてる?」

「かろうじて」

明石さんがキャスターを連れ立ってすぐ横まで来ていた。彼女は膝を折り、俺を小枝でつつく。つつん。

「やめてくれ……さすがに魔力切れで起き上がる気力もないんだ」

「だからじゃない」

つつん。

顔を動かしてストラテジストを探す。俺のサーヴァントはあかりを褒めるのに一生懸命でマスターを助けるつもりはないらしい。自分の味方はいっだって自分だけなのか。

屋上ではアーチャーがこちらに向かって大きく手を振っている。アーチャーの晴れやかな顔に安堵する。どうにもバーサーカーとは因縁がありそうだったのだ。よかった。

アーチャーは一度顔を隠したかと思えば、何かを抱えて飛び降り、こちらへと歩いてくる。彼の腕にいたのは一人の少女だった。無造作に束ねられた黒い髪に同じ高校の制服を着ている。魔術師らしき痕跡もなく、ごくごく一般的な少女だ。

「アーチャーのマスターだね」

アサシンは痛ましいものでも見るかのように顔をしかめた。

「記憶消して、近くの交番にでも届けるのがいいだろう」

「そうだな」

あかりを十分に褒め終わったのか、ストラテジストもこちらに来た。助け起こそうと差し出された右手に何かが重なって見える。

よく晴れた青い空だった。雲も少なく、穏やかな気候だ。

差し出された右手を掴んで立ち上がれば、青い髪の青年だった。髪と同色の瞳に呆けた自分の顔が見えた。初夏のように爽やかで運命を切り開くだけの力がある人だった。

頭を振り、先ほどの何かを振り落とす。隣で肩を貸してくれているのは白い髪のいつものストラテジストだ。

「バーサーカーのマスターはこのままあかりたちをお願いするとして、ストラテジストは蒼井くんおんぶして帰るのよね」

「じゃあ、今日は解散！また明日中庭でね！」

明石さんは強引に場をまとめ上げるとキャスターを伴って、そそくさと帰宅してしまった。

「一哉くん」

「どうした、あかり？」

「たぶん、同じこと考えてると思うんですけど」

「そうだな。多分、同じことだな」

「明日って、学校お休みですよね」

明日は土曜日。公立高校である我らが白柳高校はくりゅうこうこうは休日である。明石さんだったらこんな時までうつかりさんだ。

「僕から後で連絡しておきます」

「明石さんの連絡先知ってるんだな」

「はい。以前、同盟を持ちかけられた時に」

「じゃあ、俺とも交換してくれないか？」

「……はい！」

あかりの綻ぶような笑顔に理由を尋ねれば、「僕、あまり同性の友人っていないなかったの
で、とてもうれしいです」とのこと。これだけ可愛らしい服を着ていて、似合うってい
うんだから同性ではなく異性の友達のほうが多かったのだろう。

あまり社交的ではない魔術師の俺も似たようなものだった。

この日、大事な友人が一人増えた。